



大方あかつき館報

第31号  
2019年11月発行

# あかつき

第31回 上林暁文学館企画展

## 『上林暁と東京の風景』

上林暁はふるさとを愛し、郷里を舞台にした作品も、たくさん残っています。

しかし、「どんなに不遇で、つらいことがあるうとも文学をもつて、一生を費こう」と決意していた彼にとつて、田舎は作家の安住すべきところではないと考えていました。

毎日の農作業に追われる人々を見てみると、ややもすると「文学何物ぞ」と懐疑的になり、田舎の生活は文学者にとつて害敵であると言っています。『野山』（一九六三年）の中では、「東京の多忙と活気の中に身を置くと、自分もその中の一人であると感じて、初めて所を得たような安堵をおぼえるのだった。」と創作意欲旺盛な文学者の本音も語っています。作家上林暁は、東京大学に入学以来、亡くなるまでの五十六年間東京で暮らしてきました。第31回企画展では、その東京での足跡を追ってみました。

### 菊富士ホテルの跡

【菊坂二丁目】『新潮』昭和51年4月号  
私が初めて菊富士ホテルへ行つたのは、われわれの英文学の講師である英詩人エドモンド・ブランデン先生を訪ねたときである。ブランデン先生は菊富士ホテルに止宿してみたのである。夕方、窓の外に、子供が大ぜい集つて騒ぐのを見ると、故郷イギリスを思ひ出す。かういふ郷愁の詩があるやうだ。

◆菊富士ホテルの由来  
明治30年岐阜県大垣出身の羽根田幸之助・菊江の両親が、この地に下宿「菊富士」を開設し、大正3年に五層楼を新築して菊富士ホテルと改名し営業を続けたが、昭和20年3月10日の戦災により、50年の歴史を閉じた。この間、菊富士ホテルに止宿した内外の文学、芸術、思想、医科学、政治経済各別（わたり）、多くの逸材を輩出、近代日本の歩みに輝光を放ち、その名を今日に伝えている。

- 主な止宿者
- 石川 淳(小説家)
  - 宇野 浩二(小説家)
  - 宇野 千代(小説家)
  - 尾崎 士郎(小説家)
  - 坂口 安吾(小説家)
  - 高田 繁(俳句家)
  - 谷崎潤一郎(小説家)
  - 直木三十五(小説家)
  - 広津 和郎(小説家)
  - 正宗 白鳥(小説家)
  - 真山 青果(劇作家)
  - 竹久 夢二(画家、詩人)
  - 二本 浩(哲学者)
  - 中條百合子(小説家)
  - 湯浅 芳子(ロシア文学翻訳者)
  - 大杉 栄(思想家)
  - 福本 和夫(経済学者)
  - 伊藤 野枝(婦人解放運動家)
  - 三宅周太郎(演劇評論家)
  - 兼常 晋作(音楽・文芸評論家)
  - 菅谷北半屋(博識雑記者草分け)
  - 吉村 翰南(官僚・政治家・歌人)
  - 吉本 一男(官僚・政治家)
  - 小原 直(検察官・弁護士・政治家)
  - 月形龍之介(俳優)
  - 片岡 我重(歌舞伎役者)
  - 石井 瀧(舞踏家)
  - 伊藤 大輔
  - 溝口 健二(映画監督)
  - 高柳健次郎(工学者)
  - エドモンド・ブランデン(英詩人の詩人)
  - セルゲイ・エフェーエフ(ロシアの大富豪)



【枯木のある風景の出来るまで】(昭和44年)  
私は東京の大学に入ると、本郷菊坂町八二番地の宮下方に下宿した。そこは宇野浩二氏が仕事部屋にしていた菊富士ホテルと同じ番地で、窓から顔を出すと、菊富士ホテルの赤煉瓦の建物の一角が見えた。夜になると、部屋には赤い灯がともつた。ある冬の朝、登校しようとして落第横丁まで行くと、向こうから宇野浩二氏と廣津和郎氏が肩を並べて来るのに出会いはしたことがあつた。菊富士ホテルに行くところのやうで、二人ともインパネスを着てみた。背は、二人とも私より高かつた。私は仰ぎ見るやうにして二人とすれちがひ、うしろを振り返つて二人を見送つた。ひどくあこがれをそそられたやうな気がした。

第31回 上林暁文学館企画展  
上林暁と東京の風景

2019年11月1日(月)～11月30日(日)  
会場：大方あかつき館 上林暁文学館  
(休館日：木曜日、祝日、日本会議日)

東京の多忙と活気の中に身を置くと、自分もその中の一人であることを感じて、初めて所を得たやうな安堵をおぼえるのだった。

私は東京にみても、東京の生活を十分に楽しんであるとは思っていません。東京は多忙な向、東京の思想を受けるところも少ない人間である。多忙な人間でも、四十年住み続けてみると、大都会の喧騒、魅力、機軸などが定みづいて、もはやそれなつては生活に慣へられなくなつて居るのだ。(1964年刊行)

上林暁文学館 / 〒113 高野町多摩型通町人野521-1 大方あかつき館内  
TEL 03-641-2110 FAX 03-650-41-022 E-mail: akatsuki@uak.or.jp





## 戸崎町崖の上の家の風景 2019

◆ 東京市小石川区戸崎町一三番地  
東京で二番目の住居で  
「星を撒いた街」の舞台

■旧戸崎町（昭和39年までの町名）  
1623（元和）9年伝通院（浄土宗のお寺）領となり、のち町屋が開かれ船先町と称した。白山御殿が造られた後も、千川に船が浮かび、御殿の方に船先を並べて荷物の積みおろしをした。それで船先町、後に戸崎町となったといわれる。また、千川の谷に突き出た台地の先という意味からともいわれる。（文京区）

【スケッチ・ブック】（昭和21年10月5日）

住み慣れた菊坂町を去り、小石川戸崎町の崖の上の家に引っ越したのは、十月の初めだった。子供の一人ある小学校の教員夫婦の住んである家で、私達の借りたのは、階下の長四畳二間だった。

## 共同印刷工場2019

【星を撒いた街】（昭和6年10月）

なるほど、障子の外は素晴らしい見晴しであつた。さつき白河が石段の上で振り返つた眺望よりも更に全幅的な眺望であつた。すぐ下は崖になつてゐて、それからずうと谷合のやうな低地に黒々と人家が密集し、向うに行くほどずうとせり上がつてゐて、その一番上のところに、白いセメントの建物が置物のやうにつかつてゐた。満天に星が乱れ咲いてゐた。燈火の数はさつきよりも幾分少いやうではあるが、それでも何千何万といふ屋根を敷きつめた廣大な海原にわたつて、きらきらと数限りなく煌めき合つてゐた。これは空の星を撒いたんだ、と白河はもう一度感嘆した。それにしても、撒かれた美しい星の棲むこの街には、どんな人達が生活を営んでゐるのだらう。

（中略）

K印刷工場

「あすこの谷のまん中あたりに、がっちりした建物が見えるだらう、  
（中略）

あれが名高いK印刷所だ。職工が何千人とゐるんだよ。

このあたりの人たちは直接間接あの印刷所で食つてるんだ。」

それでは、あの星といつしよに棲む人たちの大部分は、あすこの工場に働いてゐる男や女たちにちがひない。或は、それらの人々を相手に商売してゐる薬屋やおでん屋や散髪屋たちにちがひない。

「ちやあ東京で指折りの貧民街ですね。」

「さうさ。どぶは汚いし、雨が降りや直ぐ水が溢れるし、手に負へないところだよ。」

「それにしても灯だけは流石きれいですね。」

「そりや、きれいさ。いくら貧乏でも汚くても、心までは汚くなりやしないさ。むしろ無邪気できれいだよ。つまり灯は心の表現だね。」



## 駒込アパートメントの風景2019

◆東京府北豊島郡築鴨町上駒込五一七 駒込アパート  
東京で三番目の住居。  
ここで、長女伊禰子さんが生まれた。

### 【故地】 (『展望』昭和24年6月号)

去年の暮の迫つた或る一日、私は娘を連れて、駒込へ行つて来た。昭和の初め頃、七八年の間、駒込の染井下と言はれるあたりに、私は世帯を持つてゐた。最初は、駒込アパートといふのに長く住んでゐた。娘は、そこにゐた時生れたのである。それから、程近い瀧野川区西ヶ原の二階屋に暫く住んでゐた。そこで長男が生まれた。(中略)

私達は動きはじめた。ふと見ると、往きには気付かなかつたのに、アパート跡の屋敷に接して、製綿会社の看板の出た門が立つてゐた。「あはア、この綿屋はまだあつたのか」と私は驚きながら、門の奥を覗き込んだ。人の影は見え、バラックの建物が、広い庭の奥にあつた。「この綿屋は、お父さんたちがゐた時分からあつたんだ。このあたり地盤が弱いもんだから、綿を積んだトラックが出入りする度に、アパートの建物が揺れたものだ。だから、お母さんが常子を寝かしつけてゐると、直ぐ目を覚ましたよ。」

### 【駒込アパートメント】 (『文藝展望』昭和50年春季号)

間もなく「オンナノコマル」といふ電報が来た。私は暫く考へた末、漱石全集を開いて「三四郎」に美禰子といふ女が登場するのを知ると、それをもちつて、伊禰子と命名することにした。

## 西ヶ原のアパートの風景2019

◆東京府北豊島郡瀧野川町西ヶ原三〇六番地  
東京で四番目の住居、西ヶ原、長男幸夫が生まれた場所、  
ここに住んでいる時期、帰省中に泥棒に入られた。  
「だんらの家」が、伊禰子さんと仲良しになつた子供がいた  
お医者さんの家。

### 【安住の家】 (昭和13年5月)

ひた走りに走る郊外電車で揺られながら、荷物のことを考へてみると、勇は東京を立つ前住んでゐた瀧野川西ヶ原の家を思ひ出した。あすこへ住んでゐたのは一昔前のことのやうな気がする。それは道角にある二階家で、田舎にかへつた種子が、「東京のおうちには二階があるよ」と自慢にしてゐたが、その時はもう家主の手にかへつてゐたのである。南隣は町医者で、門に群れ咲く占野桜の木があつて、それが散る時は勇の書齋にしてゐた二階に溜るほど吹き込んだ。待合室には水色の電灯がともつて、夜中に注射する子供の悲鳴が聞えて来たりした。

### 【故地】 (『展望』昭和24年6月号)

「泥棒に入られたつて言ふのは、この家にゐた時のことせう。」「さうだ、みんなで国へ帰つてゐる間に入られたんだ。(中略)」「ここに山ノ井さんといふお医者さんの家があつたんだ。」と、私は玄関口の敷石を示しながら言つた。「山ノ井君といふ少学校へ行つてる子供があつて、毎朝お友達に来て、ヤマノキクン、ヤマノキクンと節をつけて呼ぶんだ。常子がそれを聞き覚えて、ヤマノキクン、ヤマノキクンと、真似をしたもんだ。」「幸夫が生まれたのは、ここだつたせう。」「さうだ。幸夫が生まれるといふ朝、昭和八年の五月五日の朝だつた。お父さんが電車通りまで円タクを呼びに行つて、ここから、お母さんに常子に春子叔母さんにお父さんに、みんなが自動車に乗つて、大学病院まで出かけたんだ。」



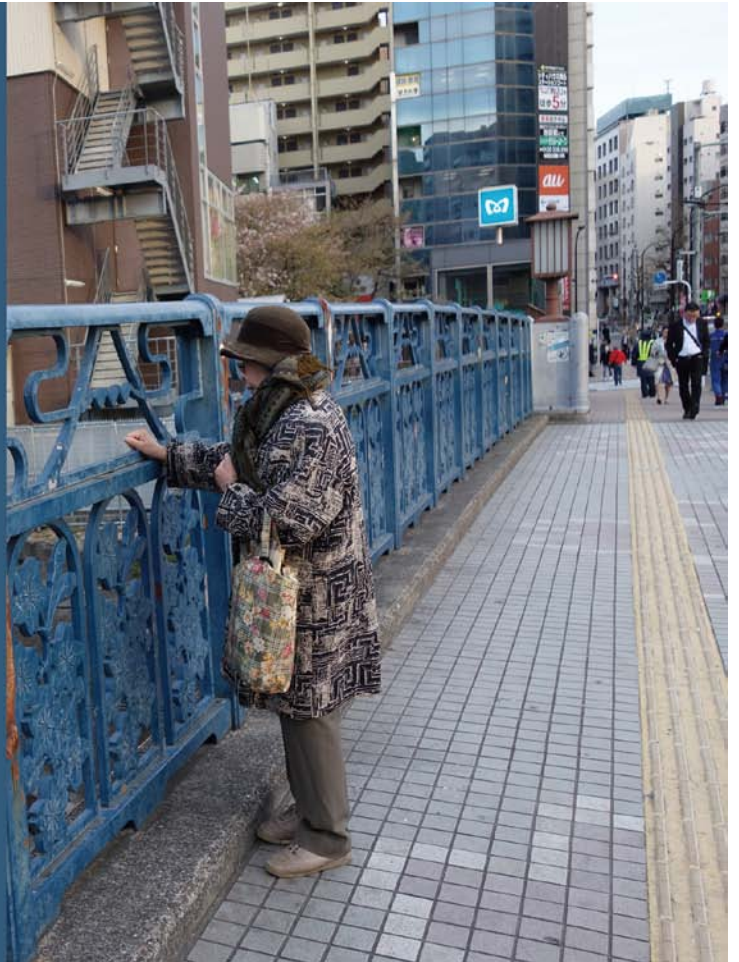
# 駒込駅の陸橋2019

## 【故地】(『展望』昭和24年6月号)

私達は駒込駅で降りた。私は駅前の陸橋を指差して言った。「西ヶ原にみた時分、常子が迷子になったから、お母さんが探してみると、あすこの陸橋の手摺の間から、省線が出入りするのを眺めてみたつて。」  
「さう。」娘は見る見る涙ぐんだ。  
「西ヶ原の家からここまでは、今の家から阿佐ヶ谷の駅へ出るくらゐあつたんだが、一人でよく来られたものだと思ふよ。」

## 【迷い子札】

「多根子は小さいとき、よく迷ひ子になることもでした。その時分、私達は瀧野川区の西ヶ原に住んでいましたが、多根子が、度々迷ひ子になるので、妻はよく探し歩いてみました。家からちよつと離れた原つばに転がしてある大きなセメントの土管の中に入って、近所の子供たちが遊び騒ぐのを見てみて、帰つて来なくなつてみたこともありました。  
省線駒込駅のそばの陸橋にしやがんで、手摺の間から、駅を出入りする電車を見てみるのを発見したこともありました。妻が散歩に連れて出て、そこから電車を見かけたことがあつたので、ひとりて出かけたものと思はれます。家から駒込駅までは、歩いて十五分近くの道のりでしたから、三つか四つの子供には、相当の距離でした。」



## 【安住の家】(昭和13年5月)

真宗願真寺説教場の庭に猫柳の花が出てみたり、それらを眺めながら歩いてゆくと如何にも長閑で、どつかに好い家がありさうに思へて来るのだつた。さういふ風にしてぶらぶら歩いてゐるうちに、たうとう小さな空家を見つけたのだつた。  
その家は六畳に四畳半に三畳の古びた小さい家だつた。

## 【開運の願】(昭和23年4月6日)

私の家は、六畳四畳半三畳、三間きりの陋屋である。三方を隣家に取囲まれ、その中にちよつと嵌り込んだ恰好の小さな家で、台風が来ても、屋根の空遠く素通りして行くあそばいで、それが唯一の取柄である。住みついた当時は家賃十四円であつた。友達や仲間うちで私の家が一番小さく、「底を衝いたねえ。」と冷かされたものである。「もつと門戸を張つてはどうだ。」と言つた友人もあつた。しかし、私は期するところがあつたので、この家に住み通した。十三年間、住み通した。戦争後の今日では、「ちゃんとした家に住んでゐられて、羨しいですよ。」と言つて行く人もある。戦争中疎開をしてゐれば、私はこの家を手放さねばならなかつたであらう。しかし、私は疎開をしなかつた。お蔭で、小さくともちゃんとした家に住んでゐられるのである。

## 【天沼】(昭和27年)

私がこの天沼に住み着いてからもう十七年になる。引越して来たのは、二・二六事件の直後で、庭の隅や、家の前の道ばたには、まだあの雪が残つてゐた。(中略)  
私の家は、阿佐ヶ谷と荻窪駅の殆ど中間に位してゐた。初めて私の家へ来る人は、言ひ合せたやうに、荻窪からやつて来る。地図を見ると、荻窪駅前あたりが、既に天沼の一丁目となつてゐるからかも知れない。

## 【流萬記】(昭和16年12月)

子供達が、私の「流萬の家」を、彼等の「我が家」として、この新市区の一廊を、彼等の故郷として育つてゆくを見て、私はふと涙ぐむことがある。子供達は、この頃では、毎晩夕食をすませると、ハーフ・コートを着て、分同班別りの火廻りに出かけてゆく。狭い路地内を、「節約時代は先づ防火」と叫んで、カチカチと拍子木を叩く。また、「火事は心の弛みから」と叫んで、カチカチと叩く。その祈高い澄んだ声の中に、うちの子供の声も交じつてゐる。私はそれを聞くと、ふと胸がつまつて来るのである。



(館長の余談)  
寂しい報告をしなければならぬ。  
士林さんの住んでいた天沼の家が、2019年1月から2月頃に取り壊されていた。これまでに、この家を訪ねた人は、どれだけいたことか……。



# 阿佐ヶ谷の古本屋

(館長余談)

ここに出て来る少弐君は、太宰治のことである。太宰は、彼の代表作『お伽草紙』を戦時中に防空壕で、五歳の娘に絵本を讀み聞かせながら着想したといわれる。原稿の執筆に取りかかったのは昭和一〇年三月一〇日東京大空襲直後をいうところなので、上林が阿佐ヶ谷の古本屋で見かけたときは、その前後のことであろう。このたび、『お伽草紙』完全原稿が、日本近代文学館の所有となり、それを記念して二〇一九年に「太宰治創作の舞台裏」が開催された。

## 【死と少女】 (『群像』昭和29年2月号)

栄作が一番好んだのは、古本屋だった。古本屋に入つて行くと、彼は舐めるやうに棚を見てみて、出て来るすべを知らなかつた。幸代は父と一緒に入つて行つて、映画雑誌をめくつたりしながら待つてみた。しびれを切らすこともあつたらうが、一度も父を促し立てることはなかつた。日用品には金を出し惜む栄作も、珍らしさうな本となると、幸代から見れば魂消るやうな値段であつても、さつさと買ふのだつた。

## 【更年期】 (昭和23年8月6日)

最後に、少弐君に会つたのは、昭和十九年の暮であつた。まだ戦争中で、空襲の始まつた頃だつた。或る日、阿佐ヶ谷駅前の古本屋へ入つて行くと、そこで思ひがけなく、古本を漁つてゐる少弐君の姿を見かけた。わざわざ吉祥寺から出て来たものらしかつた。戦闘帽に、ゲートル巻きだつた。何を漁つてゐるのかと聞くと、かちかち山や花咲翁のお伽話を探してゐると言った。それを小説に書くのだと仄めかした。

# ボルガ

## 【諷詠詩人】 『新潮』昭和38年1月号

私は某官省の仕事を手伝ふ、ある委員をしてゐる。その日も委員会の帰りがつた。夕食が出て、少しおそくなつてゐた。虎ノ門で地下鉄に乗つたとき、同省調査官の塚本欣二氏と一緒にゐた。塚本氏は役人タイプといふよりは、文学者タイプの人である。

(中略)

「どつかで、ビールでも一杯飲みませうか。」と私は誘つた。

(中略)

「俳句の連中がよく集まる店で、『ドン』と言ふんです。

『静かなるドン』のドンです。」

(中略)

「ご存知ですか。」

「いや、まだ行つたことはないけど、『ドン』といふ店の名だけは知つてゐます。去年の夏、高台鏡一郎といふ詩人が僕を訪ねて来たとき、新宿駅西口の『ドン』といふ店にいつでも行つてゐるから、一度『ドン』へ来て下さいと言つて、煙草の箱をちぎつた紙切れに『ドン』の電話番号を書いて行つたんです。

(中略)

私は塚本氏のあとにつづいてドアをくぐつた。店内は相当広く、床は赤煉瓦の敷き詰め、民芸調の椅子と卓子が並べられてゐて、若い男女がビールを飲んでゐた。

狭苦しくごたごたした、薄暗い小さな店を予想してゐた私には、高台鏡一郎がいつもとぐろを巻いてゐたらしう思はれる一隅を探し出すのが困難だつた。

(館長余談)

「ドン」＝「ボルガ」、ロシア連邦を流れるヨーロッパ最大の川「ヴォルガ川」由来の名前。ドン川もロシア連邦を流れる主要な川であり、そこから引用されている。この店は新宿西口に今もあり、2019年4月に行つてみた。「上林さんのファン」だと言ふ店員から、「私も小説を書いたから読んでくれ」と原稿を預かつた。内容は、「ボルガ」の歴史を詳細に書いた興味深いものだった。その小説では、「アムール」と言ふ、これも川にちなんだ名前になっていた。

## ◆上林の取材記録

日録 一昭和37年—  
10月6日(土)  
山一証券大上康吉氏の車で新宿西口の「ボルガ」へ。  
10月14日(日)  
夜「諷詠詩人」の第三章に取りかかる。  
材料不足なれば下書き風に五枚書く。  
10月16日(火)  
取材のため新宿「ボルガ」へ。  
主人から二時間話を聞く。  
10月17日(水)  
「諷詠詩人」補筆。  
10月18日(木)  
「諷詠詩人」一枚半。  
10月19日(金)  
夜新宿「ボルガ」へ取材。高橋鍾太郎の遺影、遺作などを見る。  
石川桂郎氏と落合ふ。



## G駅(鷺ノ宮駅)前の通り

【野】

(昭和十四年十二月)

二年ばかり前のこと、薄い霧のかかった  
或る晩秋の日の午後、私は或る郊外電  
車のG駅へ通ずる広いバス道路を歩いて  
ゐた。

自転車で乗つた男が来るほかは、ずうつ  
と向うまで誰ひとり通つてゐなかつたの  
で、その舗装道路は無駄なほど広く見  
えた。

自転車で乗つて来る男も、道があんま  
り広くて恣な状態なので、端を通つてい  
いのか、まんなかを通つていいのか極りが  
つかず、やけを起したふうに、あつちへ  
踏んでみたりこつちへ踏んでみたり、のろ  
くさ来るのであつた。

(館長余談)  
「野」の有名な書き出しの風景に、  
やつと出会えた。「駅は鷺ノ宮駅」  
のことらしい。上林さんが杖をついて  
彷徨う姿が見えてきそうだった。

## 聖ヨハネ会桜町病院 2019

社会福祉法人 聖ヨハネ会  
**桜町病院**  
SAKURAMACHI HOSPITAL

### 【聖ヨハネ病院にて】(昭和21年3月6日)

僕はこの頃、聖ヨハネ病院の一室で寝泊りしてゐる。  
この病院の精神科へ移つて来てゐる妻を看取るためである。

(中略)

「僕はこの後書を都下K町の聖ヨハネ病院の一室で書いてゐる。  
僕は午後だけ家に行つて、夜になると病院に帰つて来る。  
この慌しさの中で、暇を見つけては、漸く後書を書きつけるところまで  
事を進めることが出来た。僕は食器筆筒の上でペンを走らせてゐる。  
外は雨である。」

読み終ると、知らぬが佛であると、僕は思った。  
「聖ヨハネ病院で後書を書くなんて、ハイカラね。貴方らしくないわ。」  
と妻は冷かした。  
「うん、僕もあんたのお蔭で、ハイカラな経験が出来たよ。」  
と言つて僕は笑つた。

### 【旧病院】『小説新潮』昭和28年5月号

聖ヨハネ会病院では、妻の病室は、階下の五号室だつた。  
明るく陽が射し込んでみて、ベッドが置いてあり、養生院の暗くて  
陰気な室から出て来ると、別の世界の感ぜだつた。





# 第十四回上林曉忌短歌大会

特選に・・・

竹下芙佐雄さん (黒潮町)

町 耿子さん (香美市)

坂下多恵子さん (四万十市)

植田馨賞に・・・

谷脇 巴さん (黒潮町)



講師：高野公彦 先生

去る8月25

日(日)に、

「第十四回上

林曉忌短歌大

会」が黒潮町

保健福祉セン

ターで開催さ

れ、県内外か

ら94首の短歌

の応募があり、特選3首、植田馨賞1首、秀作5首、佳作10首が選ばれました。

大会は、午後一時からはじまり、大西町長の祝辞のあとに、選者である高野公彦先生(朝日歌壇選者)が「短歌の見どころ」というテーマで、ご講演をしてくれました。講演では、「短歌の価値は歌集にある」として、27首の模範短歌(著名な歌人の歌)をテキストに、それぞれの歌に詠まれた時代やその背景と作者の状況などをうまく読み取り、とても解りやすい解説をしてくれました。そのうえで、「日常的であって日常的でない」「悲しいことを悲しいと歌わない」「方言を活かす」

## 大会入賞作品

### 特選

等々、魅力的な短歌を創るためのコツを惜しみなく伝授していただきました。この講演は、黒潮町のケーブルテレビでも繰り返し放送されましたが、短歌のみならず、読者をひきつける文章の書き方を教えてくれる内容でもあったと思います。

シヨウガ煮の鰹の心臓食いおれば伊豆沖漁場のなぶら目に浮く  
黒潮町 竹下芙佐雄

カーテンの隙間に見ゆる夜明け空わが名忘れし姑に添ひ伏す  
香美市 町 耿子

梅雨の晴れ間独居の人を訪えば筆談ボードと笑顔が待ちおり  
四万十市 坂下多恵子

植田馨賞  
ほととぎすのやさやかなり朝のラジオはアメリカイランの対立伝う  
黒潮町 谷脇 巴

秀作  
孫来ぬを寂しむ夫は三つめの風鈴吊るし音の違ひ言ふ  
香美市 古川 安子

すいすいと水の上をゆくアメンボウ青田のなかにとおき夏あり  
高知市 山脇 志津

五百重波くぐりし伊予の青石を据ゑて夫亡き七年を過ぐ  
丸亀市 宮西 史子

上林曉の学びし文机撫でをれば松原越しに潮風吹き来  
四万十市 安田やすよ

あす倒す杉の太きを思ひつつチェーンソーの刃を時かけて研ぐ  
須崎市 徳永 逸夫

※佳作10首は紙面の都合上割愛します。



第14回 上林 曉忌短歌大会 (会場：黒潮町保健福祉センター)

■2019第一回上林暁文学講座  
土地の力を引き出すデザイン

講師：梅原 真（デザイナー）



今年度最初の文学講座（6月29日）には、第30回企画展「砂浜美術館の時代」に合わせ、現在全国で注目されているデザイナー梅原真さんに登壇いただきました。梅原さんは砂浜美術館の生みの親とも言える人で、演題の『土地の力を引き出すデザイン』は、彼の一貫した仕事の流儀を表しており、参加された方も納得の講義でした。

■2019第二回上林暁文学講座

二 閑人交遊図の虚と実

講師：濱野安生

（上林暁と親しかったドイツ文学者濱野修の子）



第二回文学講座（9月8日）は、上林暁の作品『閑人交遊図』に出て来る濱野修氏の長男濱野安生さんに登壇いただきました。上林暁が貧困と妻の病氣と戦争に苦しんでいる時期、心の支えになっていたのが濱野修氏で、今年のセンター試験に採用された「花の精」で多摩川へ一緒に鮎釣りに行ったのも濱野氏です。彼はドイツ文学者で、

国立国会図書館設立にも実務者として深く関わった方であり、上林は彼の葬儀で弔辞を読んでいます。

今回の講座では、その長男が、上林暁の私小説に含まれる虚構と真実に迫る内容の大変興味深い話をしてくれました。

■第32回 上林暁文学館企画展  
上林暁とセンター試験

会期：2019年10月7日～12月25日

過去30年間の大学入試センター試験（国語）で採用された小説は77作品、著者は65人となっています。一人の作家で最も多いのが、夏目漱石の3

回であり、次いで2回採用されているのが上林暁他10人のみです。

はたして、私たちは、上林暁という郷土出身作家の実力を正しく認識できているのだろうか。

本企画では、大学入試センター試験という切り口から、これまでとは違う視点で上林文学にせまります。

第32回 上林暁文学館企画展  
上林暁とセンター試験

とき 2019年10月7日(月)~12月25日(水)  
ところ 大方あかつき館2F 上林暁文学館  
(休館日：未曜日・祝日・月末金曜日及び12/1)

二〇一九年大学入試センター試験（国語）の受験者数は約五十二万人。そして、国語の配点二〇〇点の内、上林暁の作品「花の精」に関する配点は五十点だった。これは、見逃せない「事件」であろう。



主催：上林暁文学館/〒789-1931 高知県幡多郡黒潮町入野6931-3 大方あかつき館内  
☎ 0880-43-2110 / fax0880-43-0222 / E-mail: akatsuki25@iwk.nac.jp

「まともな文章」(抜粋)

私の文章はまともな文章ではないかと、私は自負している。本来の文章道に則って、相当正しい文章ではないかと思っているのである。正しいという意味は、文法的な踏み外しが少なく、正確で、晦渋でなく、ケレンや誤魔化しを使わず、推敲も行きあたり、句読点にいたるまで心をつかい、かなり吟味した語彙や修辞を用いているということになるであろう。私は日本の文脈を踏まえている上に、西洋の文脈の影響も受けている。斬新ではないが、古臭くもない、面白さに感嘆させるところが少い反面、じっくり噛みしめれば味が出ようということを狙っている。



上林暁文学のふるさと

あかつき

第31号

大方あかつき館

〒789-11931 高知県幡多郡黒潮町入野6931-113  
TEL: 0880-43-2110 FAX: 0880-43-0222